

丸墓山古墳西方隣接地区試掘調査報告

教育普及・調査研究担当

はじめに

埼玉県（県土整備部公園課）では、さきたま風土記の丘を内包する県営さきたま古墳公園の拡張整備を平成16年度から開始した。（第1図）

この計画が具体化される前に、県教育委員会では埋蔵文化財所在確認の試掘調査を教育局文化財保護課とさきたま資料館共同で平成10年1月と5月、平成15年12月の計3回実施した。

その結果平成15年12月（15日～19日）に実施した丸墓山古墳西側隣接区域で同古墳の周堀と判断される遺構を確認した。断片的ではあるが、同古墳の周堀に関連する新知見が得られたので概要を報告する。

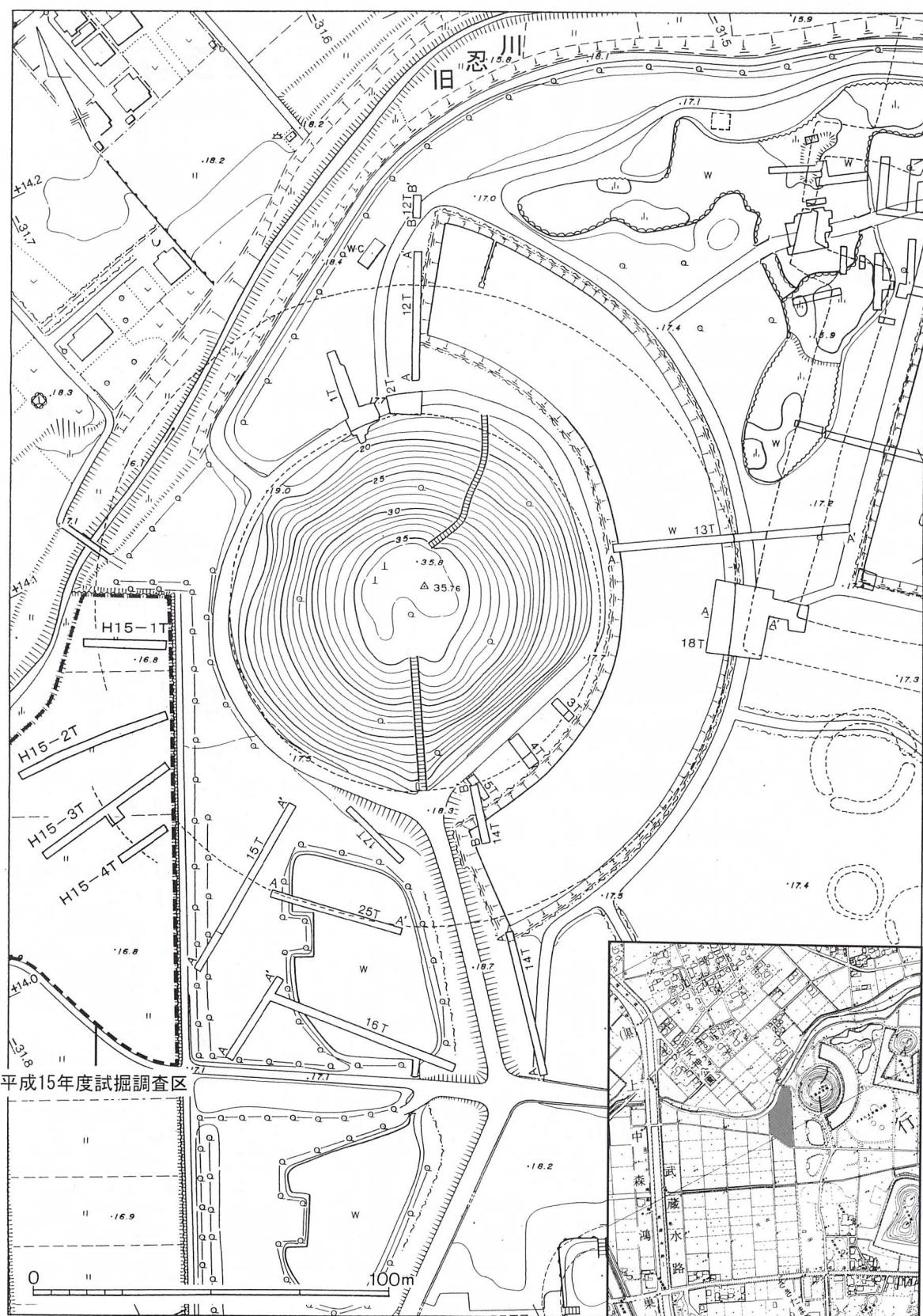
1 試掘調査地の現況と調査方法

さきたま古墳公園の拡張計画地は現在の公園供用区域北半分の西、北側は旧忍川、南は県道行田蓮田線、そして西は武藏水路で囲まれる区域、約11haで、所謂「A区域拡張区」と呼ばれる地区である。用地買収以前は全域が耕地整理済みで整然とした水田地帯で、中央部を東西に水路が横切っており、その南側はかつて航空写真に館跡のソイルマークが写っているのではないかといわれた部分である。そして、丸墓山古墳の西側隣接地は、場所的に同古墳の周堀が遺存する可能性の極めて高い地区であった。調査地内の標高は丸墓山古墳の隣接地付近で16.8m、南西部では約17.1mとやや高くなっていた。

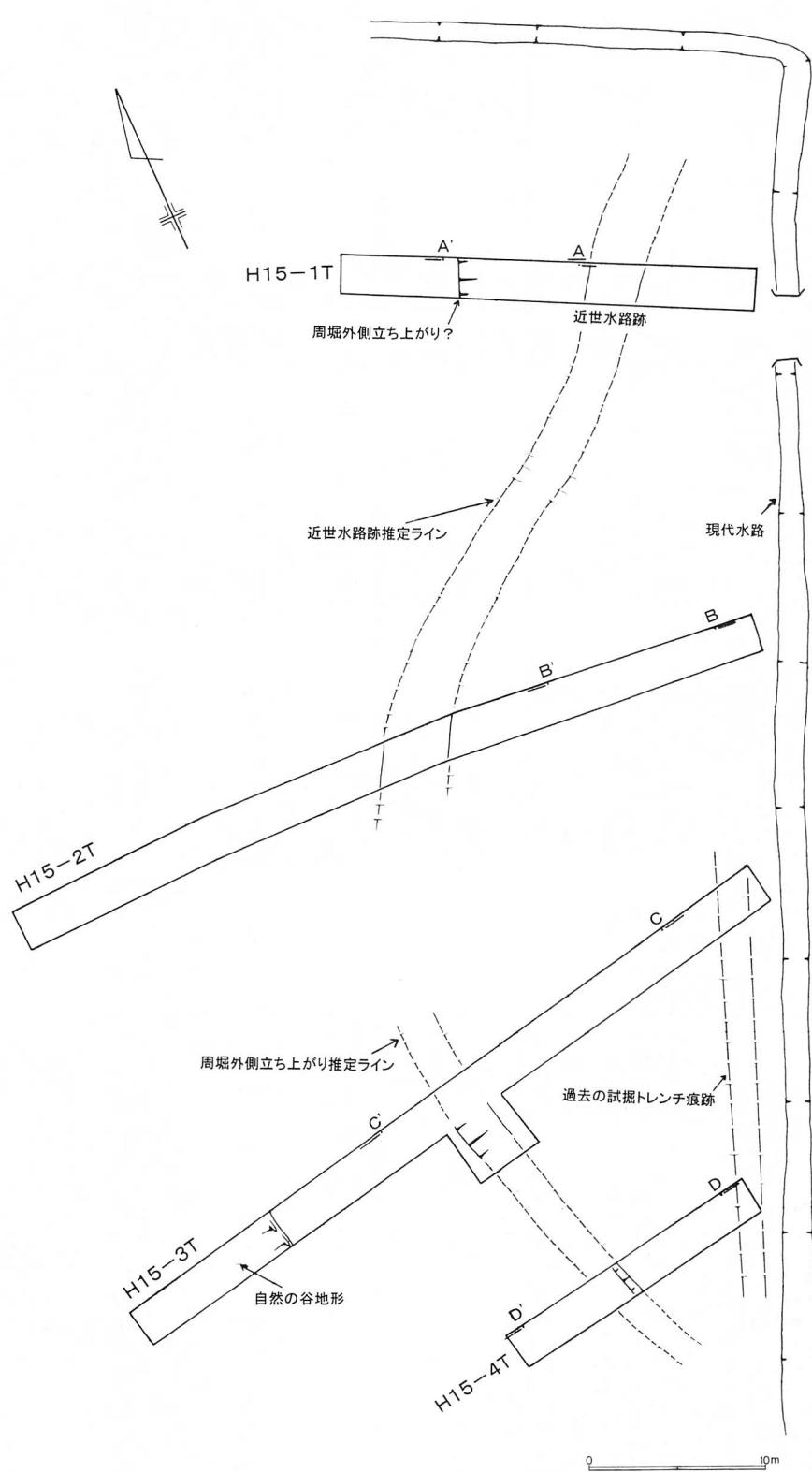
調査方法は法バケット付きのバックホウを使用して幅約2mのトレンチを設定して平面と断面を観察する方法で細心の注意を払いながら実施した。

この結果、館跡の存在の可能性が指摘されていた地区では十分な確証となる遺構や遺物の発見がなかったものの、丸墓山古墳隣接地では、同古墳周堀の可能性のある堀状の遺構と埴輪を検出することができた。

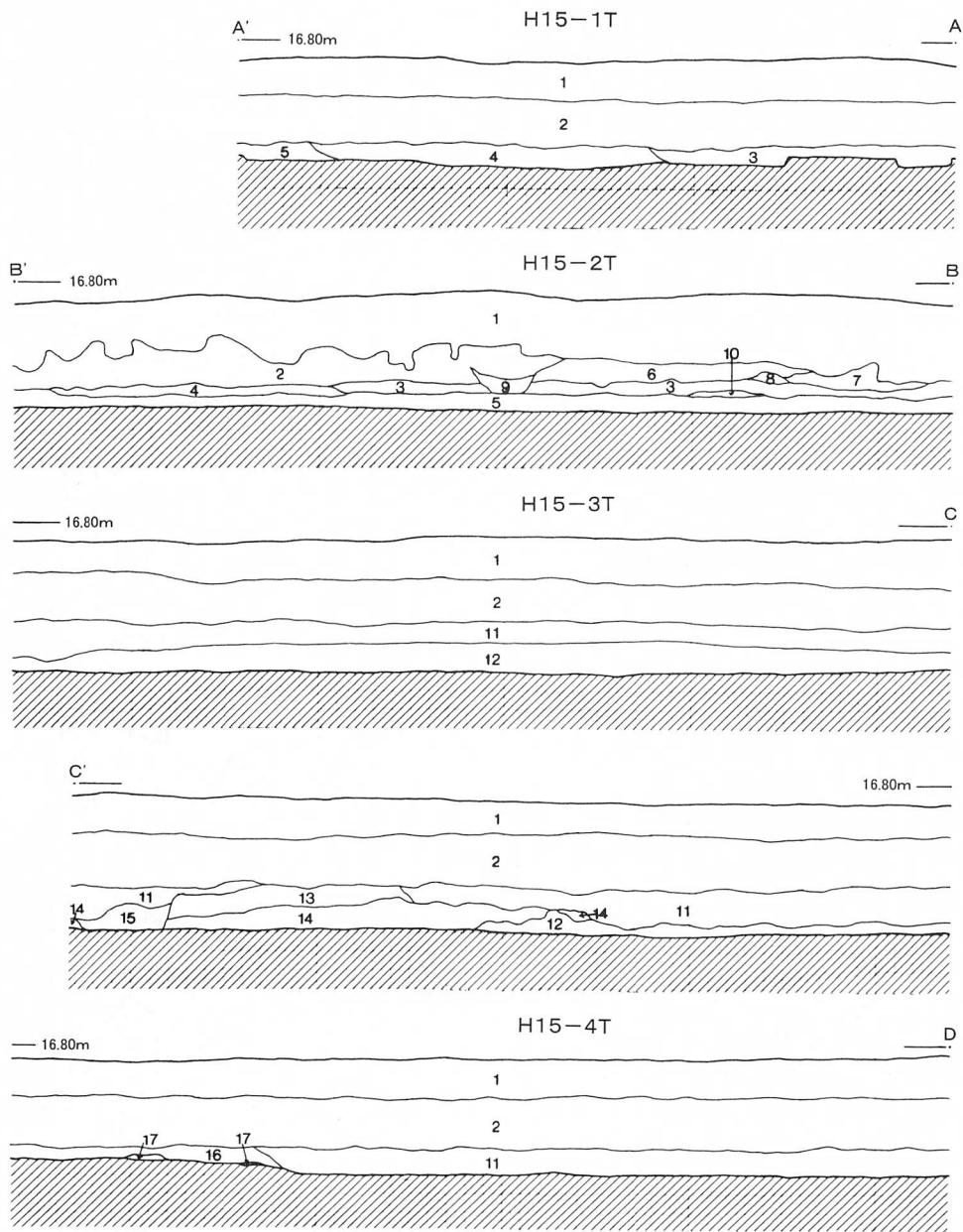
なお、測量の精度は、標高については正確なベンチマークを用いていないこと、また、平面位置も公共座標を基準に記録されたものではない。（平成10年の調査内容については埋蔵文化財発見の所見がないので省略する。）



第1図 平成15年度試掘調査区の位置（右下案内図アミカケ部分）と各トレンチの位置

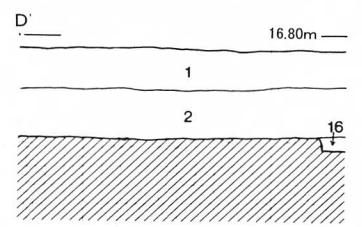


第2図 トレンチ配置図



土層註

- | | |
|----------|-----------------------------|
| 1 灰黃褐色土 | 粘質。浅間A火山灰・鉄分粒を含む。 |
| 2 青灰色土 | 鉄分粒を多量に含む。しまりが悪い。 |
| 3 黒色土 | 青灰色粘土粒を斑状に含む。埴輪・土器等を包含する。 |
| 4 暗青灰色土 | 粘土。ローム土粒を斑状に含む。しまりが悪い。 |
| 5 暗黄灰色土 | 粘土。しまりよく、硬い。地山。 |
| 6 灰褐色土 | 鉄分粒を斑状に多量に含む。 |
| 7 暗灰黄褐色土 | 黒色粘土ブロック・鉄分粒・白色粒を斑状に含む。 |
| 8 灰黑色土 | 白色粒を斑状に含む。しまりよい。 |
| 9 暗灰色土 | 粘土。炭化物を少量含む。 |
| 10 緑灰色土 | 粘土。しまりよい。埴輪を包含する。 |
| 11 暗青灰色土 | 粘土。黒色土粒・焼土粒・鉄分粒をやや多く含む。 |
| 12 黒褐色土 | 粘質土。青灰色粘土粒を斑状に多く含む。 |
| 13 黒色土 | 粘質土。焼土粒・ローム土粒をやや多く含む。 |
| 14 黄褐色土 | 砂質シルト状。黒色粒含む。しまりよい。 |
| 15 暗青灰色土 | 粘土。黒色土やや多量、ローム土粒・炭化物粒を少量含む。 |
| 16 暗青灰色土 | 粘土。鉄分粒・焼土粒・炭化物粒多く含む。しまりよい。 |
| 17 黄褐色土 | ローム土。地山。 |



第3図 土層断面図

2 各トレンチの状況（第2、3、4図）

丸墓山古墳西方隣接地区では合計4本のトレンチを設定した。北側から第1トレンチ（1トレンチ）第2トレンチの順である。第1トレンチは当初図示した北側に設定していたが地盤が軟弱なためと冬季でも水位が高く湧水して崩落が起こり、改めてその南に若干距離をおいて掘りなおした。

また、第3トレンチは一部、遺構の広がりを確認するため拡張している。

第1トレンチ（H15-1T）

長さ約23.5mに渡り、予想される周堀に直交するよう東西方向に設定して掘削した。地表下90～110cmで茶褐色ないし黄褐色土ロームの地山層が存在している。堆積土は最上層に近年までの水田耕作土と考えられる灰黄褐色土（断面図A-A'土層1）、その下に青灰色土（同2）が堆積しており、その下に周堀覆土と考えられる青灰色土（同4）と黒色土（同3）を確認した。この土層の厚さは20～30cmで、トレンチ西端から6.7m付近で途切れ、地山が浅くなるので、この付近に堀の外側立ち上がりが推定できよう。周堀底の標高は約15.5mとなる。

これら周堀覆土と予想される土層中からは確実に共伴する遺物は出土しなかった。

第2トレンチ（H15-2T）

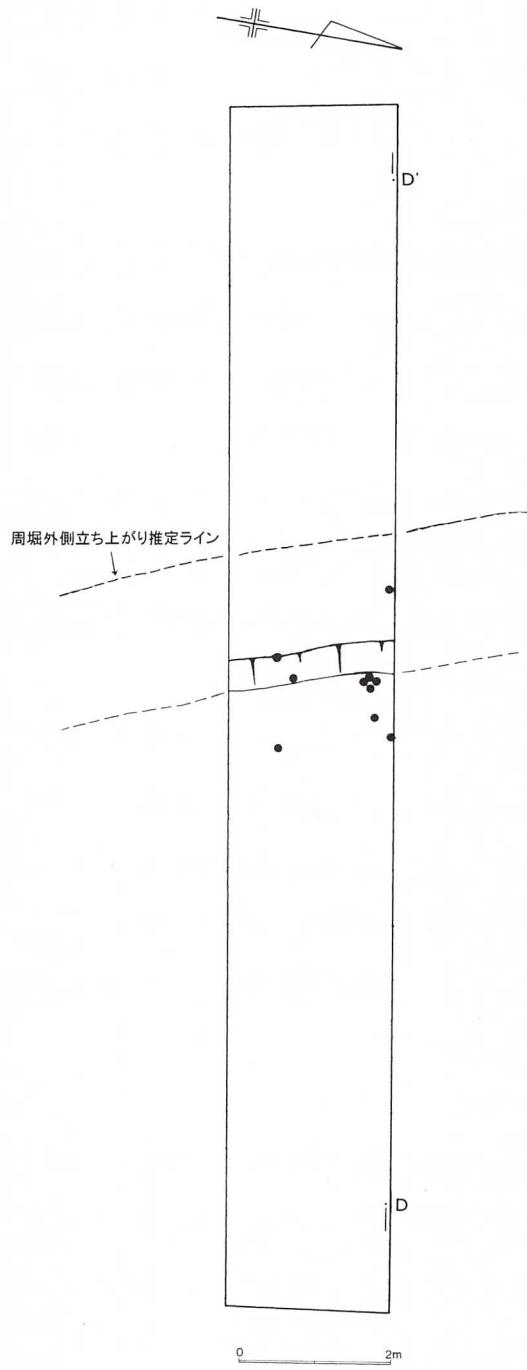
長さ約45mに渡り、予想される周堀に直交するよう第1トレンチ同様に設定、掘削した。堆積土上部は第1トレンチ同様、土層1の灰黄褐色土で、基本的にはその下に土層2の青灰色土が堆積するが、存在しない部分もあり、土層1とは不整合を呈する箇所もあった。周堀の覆土と思われたのは第1トレンチ同様土層3と4だが、厚さは10～15cmの箇所が多く、地表下120cmほどで地山層（土層5）となっている。周堀底の標高は約15.6mとなる。各層から若干の埴輪片の出土を見た。

第3トレンチ（H15-3T）

長さ約43mに渡り、予想される周堀に直交するよう他のトレンチと放射状になるよう設定、掘削した。堆積土上・中層は他のトレンチ同様、土層1の灰黄褐色土と土層2の青灰色土が堆積する。下部には土層11の暗青灰色粘土層と12の黒褐色土が堆積する。このうち12は堀底最下層の堆積土と思われる。土層14は地山と思われる土層だがトレンチ東端から22m付近で土層12に覆い被さるような状況な部分がある。これは堀の外側立ち上がりの部分が滯水によって流出している状況と考えられよう。周堀底の標高は約15.3mとなる。

なお、この部分はトレンチを南側に拡張し、立ち上がりラインを若干ではあるが、面的にとらえることができた。

また、トレンチ西部では地山が傾斜して黒色土の堆積する状況があり、谷地形の存在を示してい



第4図 第4トレンチ埴輪出土位置図（黒ドット）

ると考えられる。

出土遺物としては覆土と考えられる土層11、12中から若干の埴輪片があるが、図示に耐えるものはない。

第4トレンチ（H15-4T）

第3トレンチの南に設定して掘り下げた。長さは第3トレンチで周堀立ち上がりの可能性の高い箇所をつかんだので、その延長を確認すべく長さ16mを掘り下げた。

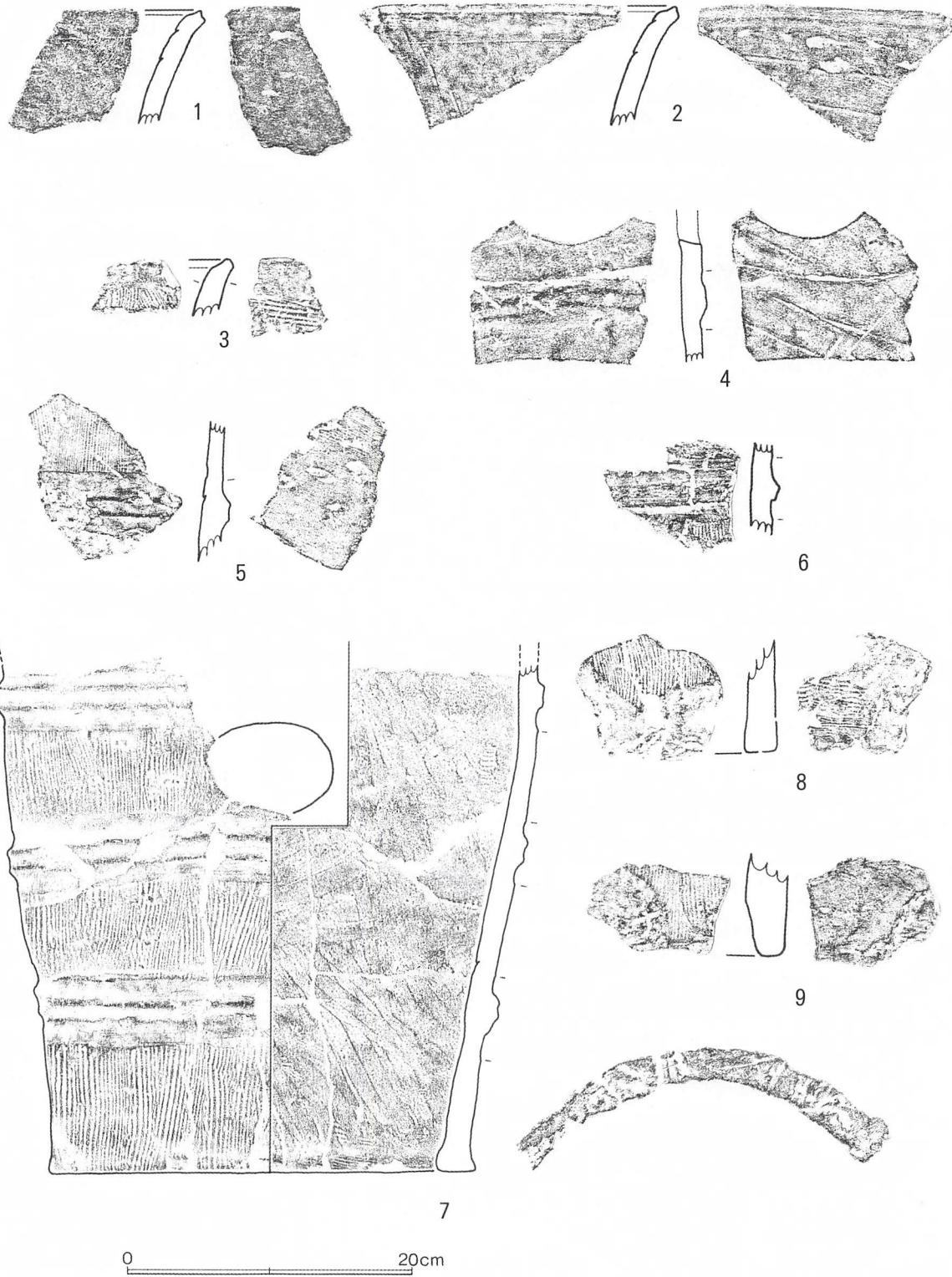
土層1、2はほかのトレンチと同様な堆積を示しており、土層16は暗青灰色粘土だが地山層と考えられる。周堀底の標高は約15.4mとなる。土層2の下方に第3トレンチと同様の土層11が厚さ約30cmで堆積しており、堀の覆土と判断され、その西部で多数の埴輪片の出土を見た。これは周堀外方に樹立されていたものが破損転落した状況と考えることができよう。

3 出土遺物について（第5図）

各トレンチ出土のうち主なものを図示した。1～3は口縁部破片。1、2は4トレンチ出土で内外面とも浅く細いハケメ。外反する口縁端部は内外をヨコナデで仕上げている。内面は接合痕が残る。3も技法は1、2と同様だが外面のハケメは顕著、内面はやや荒いハケメ、端部は強いヨコナデ。4は4トレンチ出土の円形と推定されるスカシ部分の破片。外面はハケメの後にコグチナデ、だらしのない低平なタガが付けられる。内面は細かいナナメハケメ。5は2トレンチ出土。外面はタテハケメ、低平なタガがつく。内面はヨコハケメ、接合痕が残る。6は4トレンチ出土。外面はやや粗めのタテハケメで下方に向いたタガが付く。内面はタテハケメ。7は4トレンチ出土で下から3条目のタガ付近まで遺存し、底径約25.5cmと判明した破片である。外面はタテハケメで低平なタガが付く。内面は底部に近い部分にハケメが残されるが、大方の部分は傾きのきついナナメユビナデで仕上げる。下から3段目には円形と推定されるスカシが認められる。やや楕円に近い形態と思われ、少し斜めの角度で穿孔されている。タガとタガとの間は約9.5cmある。8は2トレンチ出土の底部破片で外目はタテハケメ、内面ヨコハケメ。9は4トレンチ出土で外面タテハケメ、内面はナデ。

4 まとめ

今回の試掘調査の第1の意義は、丸墓山古墳西方でその周堀の可能性の高い堀状遺構が発見されたことである。これまでに実施された周堀の信頼に足る調査箇所としては、昭和48年度に、稲荷山古墳との周堀の重複を確認するために古墳東方周に設定した第13トレンチ、昭和60年度に古墳東～南側周堀内測立ち上がり部分を確認すべく設定した第1～4トレンチがあり、既に報告書が



第5図 出土埴輪実測図

刊行されている。(註1)

昭和48年度第13トレンチでは、粘性に富み灰白色粘土層をはさむ暗褐色土が周堀覆土の最下層に堆積し周堀底の標高は約15.3mとの所見が得られている。ちなみに稻荷山古墳の周堀底標高は約16.0mであった。

昭和60年度の第1、3、4トレンチでも周堀底を確認することができており、第1トレンチでは堀底標高約15.3m、第3トレンチでは約15.6m、第4トレンチでは約15.5mであった。改めて今回の各トレンチで推定された周堀底標高を記述すると、第1トレンチで15.5m、第2トレンチで15.6m、第3トレンチで15.3m、第4トレンチで15.4mであり、周堀がほぼ平坦に掘削されているとすれば過去の調査で得られた数値と乖離するものではないだろう。それぞれ外方の立ち上がりは明瞭に検出できたとはいえない状況なので、今後は面的な調査を実施して確定する必要がある。これまでの調査で推定される位置とは、いく分外方になるので、丸墓山古墳本体に造出しが存在する可能性が考えられる。

次に出土遺物の大部分を占めた埴輪（おそらくほとんど円筒埴輪片と判断される）についてだが、これまでの調査では全周が遺存するものはなかった。(註2)しかし今回の調査で第4トレンチから底部から第3段目までだが、全周に近く遺存するものがあった。底径は約25.5cm、下から3段目のタガ付近で約33cmになると思われる。昭和60年度調査で出土の円筒埴輪片で口縁部径が約55cm、底部径が46cm程度と推定されるものがあり、それらから8条のタガを持つ高さ90cm前後の大形円筒埴輪が想定されたが、今回出土のものはそれより小形になると思われ、同じ円筒埴輪でも複数の規格のものが使用されていた可能性が指摘できよう。樹立箇所による使い分け、補植等、いくつかの可能性を考えておく必要がある。大きさの割合に器厚が薄いことやタガやハケメにやや粗雑さが感じられるのはこれまでに知られているものと同様である。

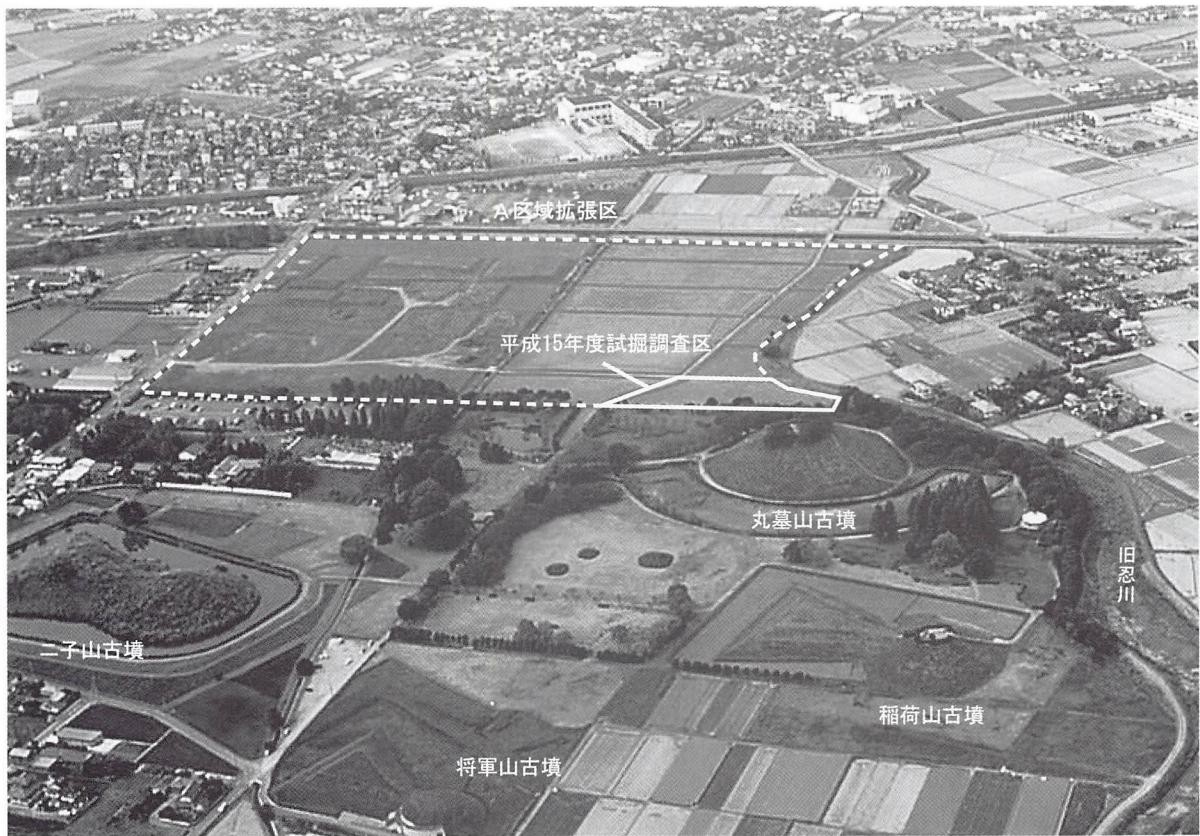
埼玉古墳群の大型古墳の時間的位置付けに関して、丸墓山古墳は二子山古墳との前後関係が注目されるものだが、埴輪の形態、周溝内、墳丘下の火山灰堆積物、土器等、比較材料が十分とは言えない状況は変わっていない。古墳の保全に留意しつつ、問題点の解明を進める視点での調査が今後とも必要である。

(文責 杉崎茂樹)

(註1) 『丸墓山古墳 埼玉1～7号墳 将軍山古墳』埼玉県教育委員会 昭和63年3月

(註2) 註1と同じ。

図版 1



試掘調査区の位置（白線部分・東から）



試掘調査区の位置（白線部分・南西から）

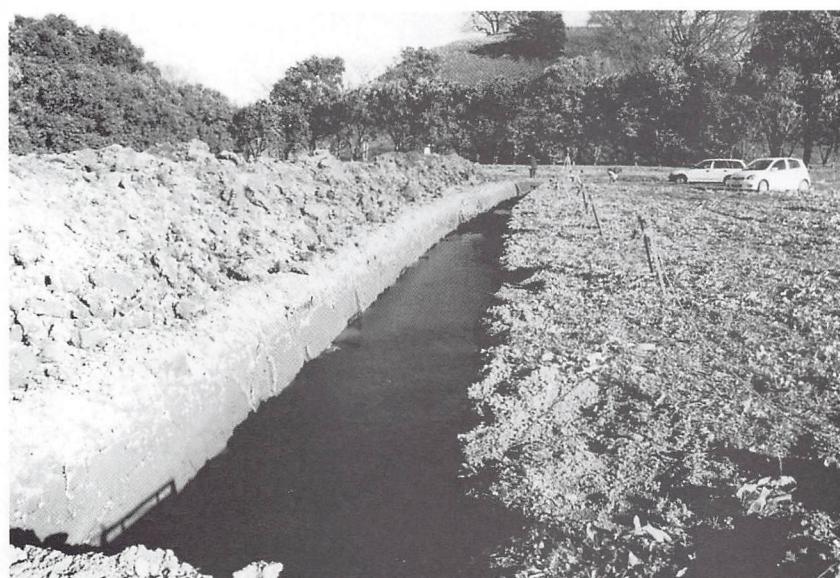
図版 2



第1トレンチ
東半部土層



第1トレンチ
立上り部分土層



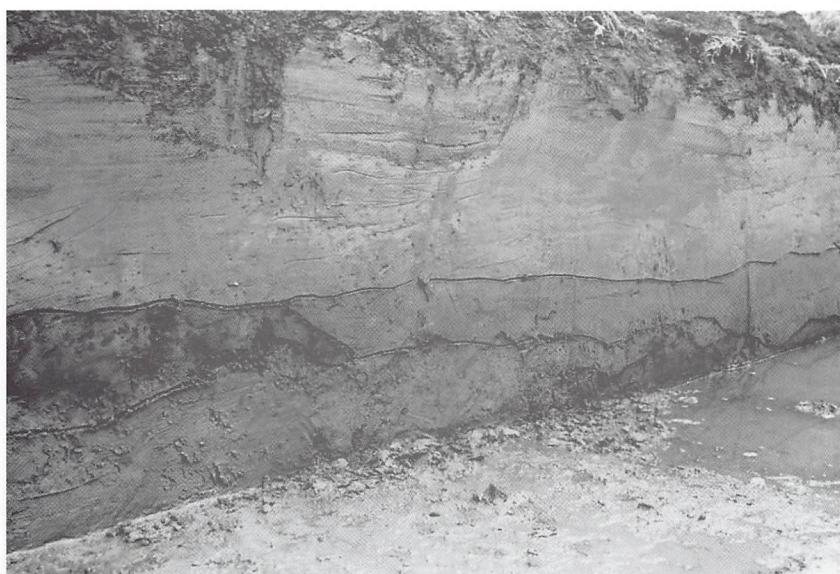
第2トレンチ全景

図版 3

第3 トレンチ
東半部土層断面



第3 トレンチ
立上り部分土層断面



第3 トレンチ拡張状況



図版 4



第4トレンチ全景

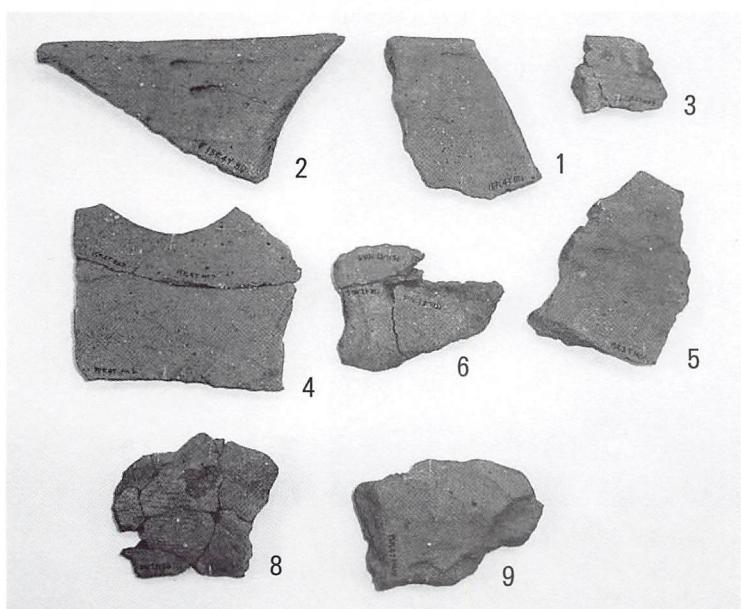
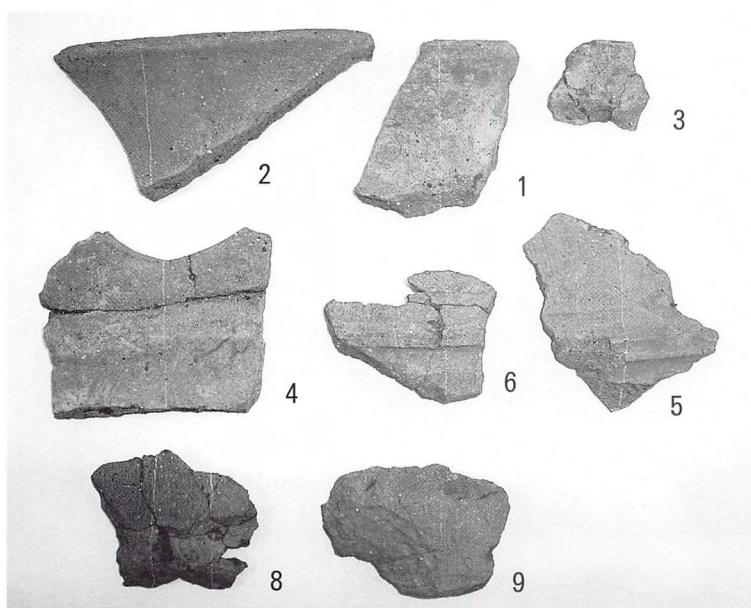


第4トレンチ土層
(立上り部分)



第4トレンチ
埴輪出土状況

図版 5



(内面)

第4トレンチ出土埴輪